

宗教への招待

第二回

宇宙の内の自己

おおみね
大峯

あきら
顯

龍谷大学教授
大阪大学名誉教授
浄土真宗教学研究教授



宗教の三つの問い

宗教の課題は、無限の宇宙の中に生きている私たちの存在の根本的な不安(定)の解決だと申しました。これは言いかえすと、私たちはいつでも、つぎの三つの問いに対する答えを求めている存在だということです。第一は、この私はいったどこから来たのか、という問いです。第二は、自分は死んだらどこへ行くのか、という問いであり、第三は、この私とはそもそも何者なのか、という問いです。

人間はいろいろなことを問う存在です。私たちは日常生活の中で、たえず、あれは何、これは何という問いを出して生きているといってもよいのです。けれども、そういう種類の問いは、私たちが勝手に思いつく問いでありますから、問うても問わなくてもよいような問いです。言いかえると、有限なものとの交渉から生れてくる問いであり、各人によって千差万別です。しかしさっきの三つの問いは、そうではありません。それは、私たちが宇宙という無限者の中にあるということ自身から出てくる必然的な問いです。すべての人間は宇宙の中に存在する以上、この三つの問いか

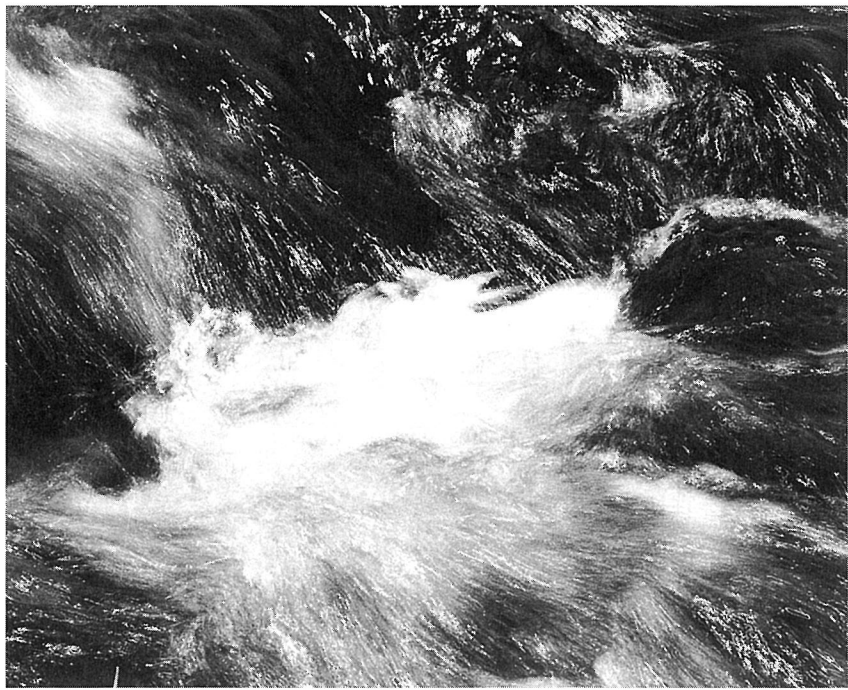
ら解放された人は一人もいないわけです。

私は毎日忙しく働いているから、そんなことを問うている暇がない、といっても駄目なのです。その人がどんなにこの問いから離れようとしても、問いは決してその人から離れません。それは、すべての人の「自

己」というものにどこまでもついて回る問いであります。忘れておろうが、どんなに忙しかろうが、この三つの問いはどこまでも私たちを追いかけて来ます。いや、死んだところで、この問いからまぬがれることはできないでしょう。死ぬということも宇宙の内において起るのであり、宇宙の外へ出てゆくことではないからです。

私たちは、初めから人間世界にいたわけではありません。せいぜい数十年前に人生というところへやって来たわけです。ではどこから来たのでしょうか。これが宗教の問題です。父と母から生れたというだけでは本当の答えにはなりません。それでは、父母はどこから来たのか、そのまた父母はどこから、というふうに、無限の時間の系列をさかのぼっても、それは身体をもった生物としての自己の始まりのことを問うているだけのことです。私の身体の始まりではなくて、私そのものの始まりはどこでしょうか。

禅仏教には「父母未生以前の自己本来の面目は何か」という有名な公案があります。これは自己の始めもしくは根源という問題は、父母から生れた自分というものの問題とはまるで違うということを言っているわけです。自分の始めは父母だという人に対して、そ



れではその父母が未だ生れない前には、君はいつたいどこにいて、誰だったのか、それを言ってみろ、というのです。父母も生れていない前には、もちろん私はどこにもいなかった、というようだけでは、この問いに答えたことにはなりません。どこにもいなかったものが、ここにいるのはどうしてか、という問いが残ります。自己がどこから来たかをはっきりしない以上、私たちの存在は本質的に不安の中にあります。私たちの意識というよりも私たちの存在そのものが、この問いの解決を求めているわけです。

第二の問いは、そういう自己というものの行方の問題です。死ねばどうなるのかという問題であります。死んだら焼かれてお骨になって墓におさまる、というだけではすこしも答えになりません。骨という物質は、私たちの身体の終点であるとしても、私たちの自己そのものの終点だとはいえないでしょう。骨がおさまっても、決しておさまらないものが、自己というものであります。自分の骨ではなくて、自分そのものはどこへ行くのか。自己というものが本当に落ちつく先はどこか。これが宗教の問題です。

第三は、そういうどこから来てどこへ行くかもわからない、この自己とはいったい何者か、という問いです。最も深く隠されています。それは私たちの自力によつては決して知ることのできないものといえましょう。それにもかかわらず、そういう自己の正体を見つけないことには、私たちの自己は落ちつけないわけです。宗教とは、私たちが本当の自分というものに出会う道です。そういう意味での宗教なしには、私たちはこの宇宙の中を空しく迷うほかにないこととなります。

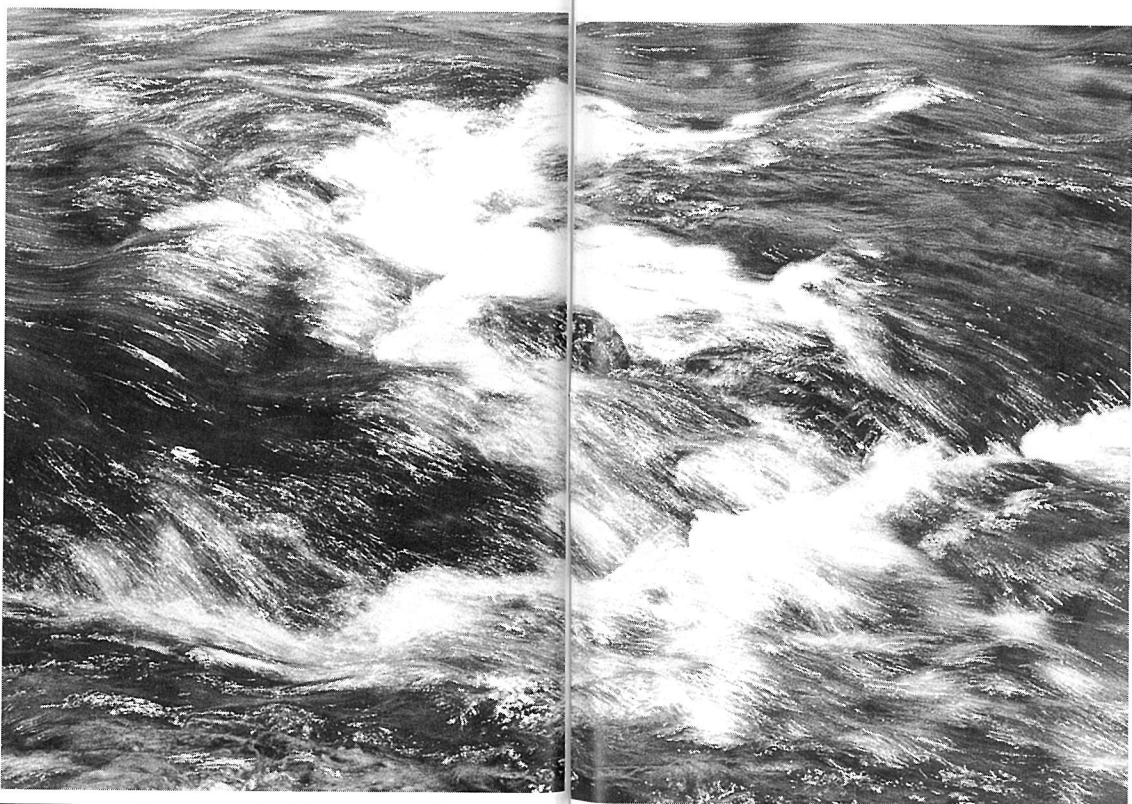
善導の自己覚醒

善導大師の『観経疏』『散善義』の中に出てくるつぎの有名な文章は、これら三つの問いに対する透徹した答えだといえます。これは伝統的な真宗学において、「二種の深信」という用語でいわれてきたところのもので、深信とは、宇宙内存在としての自己への根源的な覚醒というふうにいってよいでしょう。

一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二つには、決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑なく慮りなくの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず

(二一七頁)

す。私たちにとって、一番親しい存在は、めいめいの自己というものでしょう。他人とは離れていても、自分が自分と離れたことは片時ありません。それほど親しくつきあっている自己なら、本当は私たちが最もよく知っているものであるはずです。それでは、自己とはいったい何者なのか。——こう改めて問われてみますと、急にわからなくなります。自分の身体や性格はもとより、知性や意志という精神的なものでさえ、なお自己そのものだとはいえません。そういうものはすべて、自己が着ている着物みたいなものであります。自己とは何かという場合には、そういういろいろな着物を脱いだ裸の自己とは何かを問うているのです。そういう裸の自己というものは、実は私たちに対し



自己とはいったい何者か。自己は人間である。善導大師はそんな中途半端な答えで満足してはいません。善導大師の透徹したはげしい内省によれば、「罪悪生死の凡夫」というのが、その答えです。「生死」という語に訳された原語 *samsara* は「流転」とも訳されます。自己が罪悪生死の凡夫だということは、生れては死に、死んで生れるという気の遠くなるような無限の流転をくり返すだけで、それから決して脱却できない存在だということなのです。この生死流転には時間的な始まりというものはありません。「曠劫よりこのかた」とは無始以来ということなのです。無始ですから、もちろん無終です。人間としての私には初めと終りがあっても、私の自己そのものには始めも終りもないのです。私たち

の身体は時間空間の中で生滅しますが、私たちの自己そのものは、時空をはみ出します。自己というこのえたいの知れない存在は、死んで焼かれたぐらいでは終らないのです。お骨が墓におさまったら安らかに眠れるというようなものではありません。お骨はおさまっているでも、自己そのものは依然として生死の中を迷っているわけです。「出離の縁あることなし」とは、そういう絶望的な自己の現実の自覚のことです。

真理の通信

罪悪生死の凡夫という言葉は、お説教で何回も聞く言葉です。耳にたこができるほど聞かされているために、この言葉の表面に何か膜のようなものができてしまつて、私たちを本当に覚醒させる光線となっていない場合もあります。始めも終わりもない無限の生死流転が私たちの正体だといわれてみても、何だか神話が夢物語を聞いているみたいで、もう一つ実感が湧かないという人もいますでしょう。というよりも、現代社会の大多数の人びとは、おそらくそう思っているにちがいません。生死流転のお説教よりも、人生は一度きりだという方が、実感がある説得的な考え方だ、とい

う人が多いでありましょう。

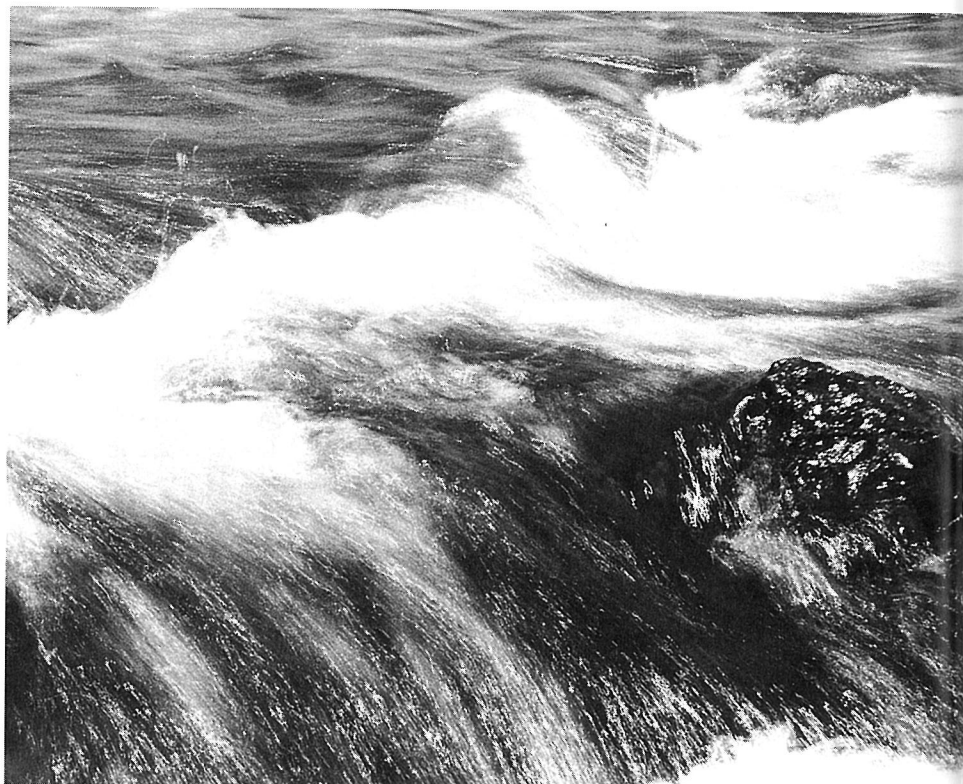
それでは、現代人のこの人生観の方が正しくて、善導大師は不自然で荒唐無稽な空想を言ったのでしょうか。そうではありません。なぜなら、元氣なときには、死ねばそれまでだと言っていた人でも、いよいよ自分の死に直面しますと、そんなのん気なことを言えなくなるからです。もし人生というものが、平生その人が思っていた通りのものであったら、彼は死に臨んでも別に動転しなくともよいはずですが、しかるに、死を前にして動転するのは、その人が自分の人生について実は真剣に考えていなかったということを証明しているわけです。

正しいのは善導大師の言葉であつて、現代人の考え方にはありません。たしかに善導大師の言葉は、現代世界のさまざまな騒音に邪魔されて聞きとりにくくなっています。ちょうど、ある電波の波長に合されていないラジオからは、その電波が音としてまったく聞えてこないか、あるいは、たんなる雑音としてしか聞えないのに似ています。けれども、私たちが明日の命もしれない私たちの生の不安の中で、善導大師のさきの言葉を心をこらして読むならば、夢を見ているのは他ならぬ私たちの方であることがわかるでしょう。それ

は酔生夢死の現代人に対して覚醒を合図している真理の通信であります。もし通信が聞きとりにくいのであれば、私たち自身のラジオの周波数を修正しなくてはならないのです。

救われがたき自己の救い

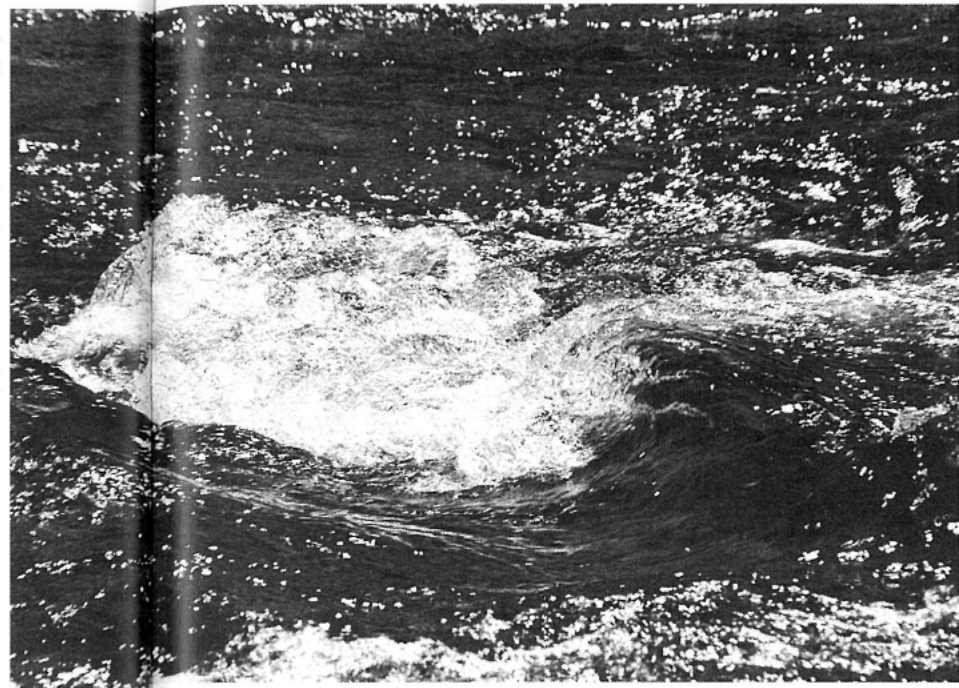
これまで述べました善導大師の言葉は、いわゆる「機の深信」といわれるところのものです。「機」とは、永遠の生死流転をくり返すほかない絶体絶命の自分の現実ということです。「深信」とは、そういう自分の真実への深い覚醒もしくは自覚を指します。この場合、深いということとは、たんなる形容詞ではありません。普通に自覚というものは、自己の意識の光で自己の姿を照らし出すことですが、ここでいわれるのは、自己の光よりも一層深いところから来る光によって自己が照らし出されるとき自覚のことです。自己の心の光よりも深い光とは、言うまでもなく、阿弥陀仏の光ということです。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなし」というのは、自分が見た自分の姿ではなく、仏によって見られた自分の姿であります。仏の前



において自己というものが絶対に否定されるという意味での自覚、自己は永久に救われようのない存在であると知らされることをいいます。

しかし、このように自己の救われがたきを知らされることは、たんにそれだけのことでなく、実はそう

いう自己を救うところの不思議な力に出会ったということでありましょう。自分を救われがたき罪悪生死の凡夫だと知らせた力こそ、この凡夫を救えるところの力だからです。それゆえ、罪悪生死の凡夫という否定の中に、肯定への大転回がふくまれています。「決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず」(二一八頁)という言葉は、「法の深信」と



切群生海」「生死の苦海」「無明海」「衆生海」などのメタファーで捉えています。それは、私たちがその中にあるところの世界そのものの構造であるとともに、私たちの自己それ自身の構造でもあります。他方、このような凡夫を救う阿弥陀仏は「本願海」というメタファーでいいあらわされています。それでは、生死海と本願海との二つが別々にあるのでしょうか。そうではないと思います。生死海が転ぜられたものが本願海なのです。自力で泳いで渡ろうともがいているかぎり、私たちが底なしのところへ引きずりこむ恐ろしい生死の苦海であります。しかし、私たちがそういう自力のはからいをやめて、海のはたらきに自分をまかせますと、その同じ海が不思議にも、私たちを浮かせる弥陀

いわれるこの大肯定を述べたものであります。

自己が救われたい存在であると知らされる機の深信と、自己がまちがいになく仏の願力によって救われると知らされる法の深信とは、正反対でありながら実は同じ一つの自覚として同時に成立します。自己とは何か。未来永劫に救われない罪悪生死の凡夫であります。自己とは何か。仏のたのもしい撰取の中にある凡夫であります。これは知性の判断や道徳的意識の立場からすれば、矛盾律に反する論理の破綻にすぎないでありましょう。しかし、宇宙の中にある自己の真相は、実にこの矛盾にあるといわなくてはなりません。たんに救われない自己も、たんに救われる自己もなお、真の自己ではありません。救われないものがしかも救われるという矛盾の自己同一こそ私たちの自己のあるがままの姿だ、ということこそ善導大師の言葉は教えているわけです。

生死海から本願海へ

善導大師だけではなく、すべての偉大な宗教者たちはみな、人間を一つの宇宙内存在として見ているわけです。たとえば親鸞聖人は、われわれ凡夫の実存を「一

の願海に転じます。それは私たちの力のとどかない海そのものの転回であります。

宗教は、私たちの存在のあり方がその根底のところから変るといふ経験です。個人としての私たちの気持が変るといふような主観的なことではありません。現代では、宗教を主観的に理解しようとする傾向があるように思いますが、これは宗教に対する根本的な誤解といわなくてはなりません。親鸞聖人の教えられた信心とは、生死海の表面に何かまにあわせの板きれを浮かべるといふような主観的な気休めではなく、生死海に自分の全部をまかせる捨身のことだといつてよいでしょう。他力の信心が「大信心海」といわれるのは、それが個人を超えた客観的な世界の経験であるということをお教えていると思われれます。